

## 消化液

# 散布省力化へ実証

## 大学や企業連携 来年度、道内でも

東京大学やバイオマスリサーチ（札幌市）などは7日、本年度から、バイオガスプラントから生じる消化液の散布作業の省力化に向けた実証実験を始めたことを発表した。自動散布化や消化液を濃縮して容量を減らすなどし、散布にかかる経費などの削減を目指している。来年度は道内で実証実験に着手する考えだ。

一般的に消化液は95%が水分で、肥料分は5%しかない。実験では水分比率を85%まで減らし、肥料分の比率を15%にすることを一つの目標とする。肥料分の重さが変わらないという前提で単純に試算すると、消化液100kgを33kgまで減らす

ことになる。散布回数削減や、車両の小型化などが見込めるといえる。大量の水分を処理するため、グレンカル・テクノロジ（東京）が特許を持つ、低温で迅速に処理物を乾燥させることができる「レドックスマスター」と

いう最新技術を活用する。消化液の乾燥でも効果があるかなどを見極めたい考えだ。消化液散布の現場では人員不足が課題となっていて、これを受け、散布作業の自動化も実証。タカキタや東京大学の深尾隆則教授らが小型の自動操舵（そう

だ）車両を製作中で、初年度は宮崎県の本部農場で実験する。来年度は道内での実験も予定。十勝管内J A士幌町や、江別市の町村農場が候補地となった。

バイオマスリサーチの菊池貞雄社長は「課題や技術などを一つずつ確実に検証していきたい」と話した。実証は農家らが個々で持つ「個別型」のプラントで行うが、将来的には複数戸から家畜ふん尿を集める「集中型」のプラントでも、今回検証する技術が使えるようにすることも見据える。

農水省の「スマート農業技術実証プロジェクト」で行い、2022年度まで続ける。